フランス語の冠詞をめぐって

長谷川 隆 久

1. はじめに

冠詞に関連する問題については，すでに昨年度の本講座において塩田勉講師がとりあげている。塩田講師は，関口文法の考え方を基底として英語の冠詞について考察し，さらに日本語との比較対照を行なった。（塩田勉「日本語の発想・英語の発想」講座「日本語教育」第7分冊参照）

今回の講座では，G. ギヨームの冠詞論 (Gustave Guillaume: Le problème de l'article et sa solution dans la langue française, Paris, 1919) を基底にして，フランス語の冠詞について一つの考え方を提起してみたい。日本語とのこまかい比較対照を行なうことは，筆者の力の及ぶところではない。したがって，冠詞のとらえ方の基本を提起することで，比較対照の参考に供していただければ幸いである。

なおフランス語の冠詞論としては，松原秀治「ふらんす語冠詞の用法」(1949年，白水社)，鷲尾猛「フランス語冠詞の基礎概念」（日本フランス語学会編集「フランス語研究」(1～3号)，同じく「フランス語冠詞の話」(昭和35年，大学書林)などがある。とくに松原氏の著書の後記には，ギヨームの冠詞論の基本解説があり，参考になる。

2. 名詞の二つの状態——可能名詞と実際名詞

冠詞と名詞は深いつながりをもっている。まず第一に形の上から見ただけでも，冠詞に名詞は切っても切れない仲にある。すなわち実際の文脈の中に現われる冠詞を見ると，ほとんど常に名詞と共存している。第二に，

この形の上での共存関係は，内容においても名詞と冠詞が深い関わりをもっていることを示している。冠詞とは何かという問題を考える場合，すなわち言語活動において冠詞が果している役割を考える場合には，名詞の様様な様相の考察が不可欠である。したがってまず名詞についての考察から論をすすめたい。

特定の名詞一つをとり出して考えてみると二つの状態が考えられる。第一は，実際の文脈の中で用いられている状態である。第二は，実際に用いられている以前の状態すなわち文脈から切離された状態である。

言語を構成する要素はそれぞれ何かを表現している。名詞も同様に何かを表現している。ところが，文脈の中で用いられた名詞と，文脈から切離された名詞とでは表現しているものが異なる。

このことを，たとえば次のような文脈に現われる「人」という名詞について考えてみよう。

(イ) 「あっ，人が来る。」

(ロ) 「あの人は良い人だ。」

(ハ) 「川のほとりに村があった。村には人と家畜がいた。」

(ニ) 「人の道にはずれてはいけない。」

(イ)，(ロ)，(ハ)，(ニ)のそれぞれの文脈に現われる「人」は，その文脈に応じて様々な意味を持っている。(イ)においては，「人」はきわめて具体的な実在物，おそらく話し手の眼前に存在する実在物を表現している。(ロ)の「人」の場合も(イ)と同様に具体的特殊的実在物を表わしているが，(イ)の「人」とは若干意味が異なっているのが感じられる。すなわちこの「人」は話し手の眼前に存在しない，(ハ)の文脈における「人」も具体的実在物であるが，(イ)，(ロ)の場合に比較すると具体性の度合が薄いように思われる。最後に(ニ)の文脈における「人」の表わす内容について考えてみると，前出の三例に比較して具体性がきわめて薄い。もはや特殊的具体的実在物の表現ではなく，一般的抽象的概念の表現である。

このように実際の文脈に用いられた名詞「人」は，具体から抽象に至る

様々な度合の様々な意味をもつ。しかも，この様々な意味のあり方は，話し手が表出しようとしているなんらかの現実の様相に対応している。現実の様相の変化に応じて「人」の意味も様々に変わるのである。しかもこの現実の様相の変化は，前出4例に限って言えば，言語的には直接表現されず，文脈全体によって表現されている。

「人」という名詞にかぎって今のべたことは，ほとんどすべての名詞にあてはまる。文脈における名詞は，常になんらかの現実に対応しており，この対応から文脈における名詞の特殊な意味が生じてくるのである。

これに対して文脈から切離された名詞すなわち使用以前の名詞は，対応する特定の現実をもたないし，また特定の意味も持たない。この状態における名詞の表現するものは，文脈中で生じるような特殊的意味ではない。むしろ(イ)，(ロ)，(ハ)，(ニ)等に現われるような様々な特殊的意味を持ち得るという可能性である。このことは，たとえば「人」という孤立化された単語だけを想い浮かべてみれば明らかであろう。抽象から具体に至るまでの様々な「人」の用例が脳裡を去来するけれども，どれとも決めかねるのである。名詞の文脈における特殊的意味は，特定の現実とそれを表出しようとする話し手の意図があってはじめて明確な形をもつのである。

ところで，対応する実現を持たないという点，および特殊的意味ではなく多様な特殊的意味の可能性を表現するという点から考えると，文脈から切離された使用以前の名詞は，文脈中に用いられた名詞に比較してきわめて抽象的である。例(ニ)の文脈における「人」はきわめて抽象的な概念を表わしているが，これと比較してもなお抽象的である。

以上のように，文脈中に用いられた名詞と使用以前の名詞とは，性格を異にしている。この性格の差異は，冠詞の問題を考えていく場合の重要な鍵である。したがって，二つの名詞の状態の差異を名称の上でも区別しておく方が便利である。便宜的であるが，使用以前の名詞は，様々な可能性を表わすという意味で可能名詞と呼び，文脈中に実際に用いられた名詞は，実際名詞と呼ぶことにしたい。

なお，可能名詞の抽象性について述べるにあたって日本語の例を用いたが，フランス語においても同じように可能名詞の抽象性を指摘できることは言うまでもない。

3. 可能名詞から実際名詞への転化——転化を表わす言語手段としての冠詞

私たちが言語を実際に用いることなく脳に蓄積している限りでは，名詞は可能名詞の状態にとどまっている。この可能名詞がきわめて抽象的であって具体的には何も表現しないという事は，すでに述べたとおりである。したがって，実際の伝達の場で名詞を役立たせるためには，何らかの現実に対応させなければならない。すなわち可能名詞を実際名詞に転化しなければならない。

日本語では，この転化は無意識的に行なわれる。無意識的という意味は，この転化を表わす系統的組織的言語手段を持たないということである。また，その結果として，話し手，聞き手の双方が，転化を意識しないということである。

たとえば第2節で挙げた例でみると，可能名詞「人」から実際名詞「人」への転化を表わしそうな言語手段はほとんど見当たらない。可能名詞「人」が，いつのまにやら実際名詞「人」に転化している。

わずかに例(ロ)の指示詞「あの」が転化を表わしているように思われる。しかしながら，「あの」は，本質的には転化を表わす言語手段ではない。元来は，話し手の意識の外に現に存在する何らかの存在物を「指し示す」働きをもつものである。そして例(ロ)の場合は，この元来の「指し示す」働きが，意識外の存在物ではなく，意識内の表象にまで拡大された場合なのである。「あの人」は，話し手，聞き手の目の届く範囲に存在しているわけではない。すなわち話し手の意識外に現に存在するものではない。しかし，両者の話題にのぼっているという意味で，両者の意識内表象として存在しているのであり，「あの」はまさにこの意識内表象を指し示す指示

詞である。転化を示す言語手段ではない。(歴史的に考えれば，指示詞と転化を表わす言語手段とは無関係ではない。指示詞の機能の意識内表象への拡大が，転化を表わす言語手段の発生の歴史的原因になっているからである。しかし，発生におけるつながりにもかかわらず，両者の機能は本質的に異質である)

さて，以上のように日本語では転化を表わす言語手段の不在を指摘できるが，これと対照的に，フランス語では，転化を示す系統的組織的言語手段が存在する。たとえば，次の例について考えてみよう。

(イ) Voici *un* homme.

(ロ) L' homme est mortel.

(ハ) Il y a *de l'*eau dans *le* verre.

この(イ)から(ハ)までの例文に出てくるすべての名詞には，必ず冠詞がついている。すなわち，いわゆる定冠詞，不定冠詞，部分冠詞のいずれかがついている。

この名詞に必ず付加されている冠詞が，実は，可能名詞から実際名詞への転化を表わすフランス語の言語的手段なのである。裏返して言うと，フランス語においては，冠詞を付加された名詞は，もう可能名詞ではない。何らかの現実に対応して特殊な意味をもつ実際名詞である。

ところで，名詞と冠詞は密接な関係をもっているが，両者を比較した場合，その表現するところは異なっている。名詞は，抽象的な概念にせよ，具体的な存在物の表象にせよ，何らかの実体的なものを表わしている。これに対して冠詞は，何ら実体的なものを表わさない。すでに述べたように，冠詞は名詞の転化の事実だけを表わす。この意味で，ギヨームは，名詞を言語の実質的部分と呼び，冠詞を形式的部分と呼んでいる。(もちろん，名詞が言語の実質的部分のすべてをおおうのではなく，また冠詞が形式的部分のすべてをおおうのでもないことは言うまでもない)

日本語とフランス語とを比較して，前者の現実密着性，後者の抽象性を指摘する人がいる。この場合指摘されている日本語の現実密着性という特

徴は，日本語における可能名詞と実際名詞の未分離，あるいは，分離の事実そのものを示す形式的部分の未発達にその原因の一つを求めることができるのではないだろうか。

4. 実際名詞が対応する現実——話し手の意識内に存在する既存の表象

名詞が実際の伝達の場で特殊な意味を表わすためには，話し手の表出しようとする何らかの現実に対応して可能名詞から実際名詞に転化しなければならない。この点についてはすでに述べた。

ところで名詞が対応する現実とは何であろうか。この点について，次の例によって考えてみたい。

(イ) Voilà des livres et voilà des revues. Les livres sont sur la table et les revues sont sur la chaise.

(ロ) Nous entrons ensuite dans la salle à manger. Cette grande pièce a deux larges fenêtres. La petite Hélène met le couvert. Elle prend, dans le buffet, des couteaux, des cuillères, des fourchettes.

(ハ) L'homme est mortel.

まず例(イ)の les livres, les revues について考えてみよう。この例文では，les livres sont sur la table 云々の発話以前に，Voilà des livres 云々という発話がなされている。この最初の発話の際に，話し手の意識内に «livres»，«revues» という二種類の表象が形成される。すなわち最初の発話は，この二種類の表象の形成の事実を言語的に表出しているのである。そして，この形成された表象は，最初の発話の後も，そのまま話し手の意識内に存在し続ける。したがって，第二の発話 Les livres sont sur la table 云々が行なわれる時点では，«livres»，«revues» という表象は，話し手の意識内にすでに存在する表象である。les livres, les revues という二つの名詞の対応する現実とは，実は，この話し手の意識内に存在する既成の表象のことである。したがって可能名詞から実際名詞への転化を，

名詞の表わす内容から考えれば，話し手の意識内の様々な既存表象への適用の可能性から特殊既存表象へ名詞を実際に対応させることだと言える。

さらにこの例についてみると，冠詞の中でも特殊な定冠詞が付されている。この点については後で詳述するが，定冠詞の付加は既存表象への単なる対応ではなく，既存表象との合致を示しているのである。

次に例(ロ)の le buffet の場合はどうであろうか。(イ)の例の les livres, les revues の場合のように，対応する表象がすでに形成されていることを示す既出の発話は，この場合には見当たらない。しかし，表象が意識内に形成されるという事実と，それを言語によって表出するということは別問題である。言語的に明示されなくとも，話し手の意識内に一定の表象が形成されることは可能である。例(ロ)において，salle à manger すなわち「食堂」へ入るという事実が述べられた際に，話し手の意識内には食堂の表象に付随して想起される様々な表象が形成されていた筈である。たとえ言語的には表現されていなくともその様々な付随表象の形成はさまたげられない。le buffet の対応する現実，すなわち既存表象は，「食堂」表象の形成およびその言語的表出の際に，付随的に想起され形成されていたのである。したがって例(イ)と比較すると，対応する既存表象の言語的表出の有無のちがいはあるが，既存表象に対応することによって転化が行なわれるという点ではまったく同じである。

さらに，例(ハ)の L'homme の場合はどうか。この場合，L'homme の対応する既存表象は，前2例と異なって一般概念である。前2例における既存表象は，対話の場において暫定的に形成される特殊表象である。これに対して，L'homme の対応する表象は，対話の場においてはじめて形成されるのではない。対話の以前にも以後にも話し手の意識内に恒久的に存続する表象であり，一般概念である。したがって(イ)，(ロ)の既存表象とは質的に異なる。また，(イ)の例と比較する場合には，例(ロ)と同様，既出の言語表現によってその形成が表出されていないという差異が目につく。しかし，表象の質の差および言語的表出の有無の差にもかかわらず，話し

手の意識内の既存表象に対応することによって転化が行なわれるという基本点では，前2例とまったく一致している。

ところで例(イ)の最初の発話に現われる des livres, des revues という二名詞については言及しなかった。不定冠詞を付されたこの二つの名詞の転化の様相についても考えてみよう。すでに述べた例の場合のように，この二つの実際名詞が合致すべき既存表象は存在しない。したがって，対応すべき既存表象，対応すべき現実は存在しないかのようである。何故なら，先に若干触れたように，この場合表象の形成は，Voilà des livres 云々の発話の際に初めて行なわれるからである。また可能名詞から実際名詞への転化の具体的内容として考えた既存表象への対応は，この場合には通用しないように思われる。転化の事実を示す不定冠詞は，既存表象への合致ではなく，むしろ「新たな」表象の形成を表わしているからである。

以上のように不定冠詞を付された名詞の転化は，一見，定冠詞を付された名詞の転化と異なる解釈をせざるを得ないように思われる。にもかかわらず，不定冠詞による転化の場合にも，既存表象の存在はきわめて重要なのである。何故なら，「新たな」表象の形成と言う場合の「新たな」という表象の属性は，何らかの既存表象の存在を前提にしなければ規定できないからである。なんらかの既存表象との比較において初めて，ある表象が，「新たに」形成されたと言うことができるのである。

もちろん，この不定冠詞による転化は，既存表象との合致ではない。しかし，既存表象との対応を広く解釈すれば，既存表象の存在を前提にしているという意味で，やはり対応と考えることができよう。

以上4つの場合を総括的に考えてみると，可能名詞から実際名詞への転化の基本的性格は，可能名詞を話し手の意識内に存在する既成の表象に対応させること，すなわち何らかの形で関係させることだと言える。これを，逆に言えば，冠詞の基本的機能は，名詞が話し手の意識内の何らかの既存表象と何らかの形で関係をもったことを示すことだと言える。

5. 既存の表象と実際名詞の表わす表象との関係——等関係および不等関係

可能名詞を実際名詞に転化するということは，結局，話し手の意識内のなんらかの既存表象と可能名詞を何らかの形で関係づけることである。何らかの既存表象としては，さまざまなものが考えられる。第4節で挙げた例だけで考えても，或る場合は，すでに言語的に表現された表象 (les livres, les revues) であり，或る場合には，いまだ言語的に表現されず，伝達の場で暫定的に話し手の意識にやどった表象である (le buffet)。また l'homme の場合には，暫定的表象ではなく，恒久的表象であり一般概念である。

このように可能名詞が関係を結ぶべき既存表象の性質は多様である。しかし，表象の性質の多様性にもかかわらず，関係のあり方自体は単純であり二つしかない。

第一の場合は，les livres, le buffet, l'homme 等における既存表象との関係である。この場合，既存表象自体の性質はさまざまであるが，ひとたび関係を結ぶべき既存表象が定まれば，関係のあり方そのものは，三名詞とも一致している。既存表象が言語的にすでに表現されているか，暫定的であるか，恒久的であるかというような質のちがいとは無関係に，転化をとげた実際名詞の表わす表象と既存表象とはすべて合致している。すなわち les livres は，その形成がすでに言語的に表現されている暫定的表象と合致している。le buffet は，言語的には表現されていないが，「食堂」表象の形成とともに，すでに話し手の意識内にやどった「食器戸棚」のイメージと合致している。l'homme の場合は，話し手の意識内に恒久的に存在する表象すなわち一般概念に合致している。

このように第一の場合は，既存表象自体の多様性にもかかわらず，関係のあり方そのものは，既存表象との「合致」である。この関係のあり方を数式で示せば，

実際名詞の表象＝既存表象

という等式になるであろう。

ギヨームは，既存表象を可能名詞がその上に展開すべき背景に見たてて，次のように表現する。可能名詞は，ある場合には，背景である既存表象に密着して展開し，背景と同じ広がり (étendue) をもつと。このある場合とは，むろん定冠詞によって転化を示す場合である。

第二の場合は，Voilà des livres et voilà des revues における既存表象との関係である。この場合には，実際名詞の表象は既存表象とは合致しない。しかし，なんらかの既存表象の存在を前提にしていることはすでに前節で述べたとおりである。したがって第一の場合と同様に既存表象は存在しており，実際名詞はこれとなんらかの関係に置かれなければならないが，その関係は「合致」ではない。des livres, des revues はこの言語的表現がなされた時点で，既存表象とは別に新たに形成された表象であり，したがって既存表象との関係は，「不一致」とでも呼ぶべきものである。第一の場合に同じように数式をもってこの関係を示すなら不等式に該当するであろう。

実際名詞の表象≠既存表象

ギヨームは先程の「背景」という考え方をこの場合にも援用して，des livres, des revues を既存表象の背景の上に浮き彫りされる「点」と考える。背景の上に「浮き彫り」されるということは，背景とのちがいを際立たせることである。

さて以上のように転化をとげた実際名詞と既存表象との関係は，きわめて単純であり，既存表象との合致を表わす等関係と，不一致を表わす不等関係と二つしかない。そしてこの二つの関係に応じて，転化を表わすことを基本的特徴とする冠詞も二つのグループに分けられる。（ゼロ冠詞については後述するので，ここには含まれない）

第一は，等関係を表わす定冠詞であり，第二は，不等関係を表わす不定冠詞および部分冠詞である。*

ところで，実際の文なり発話なりの意味解釈を行なう場合には，冠詞の

表わす既存表象との単純な関係を知るだけでは不十分である。文脈によって明らかになる既存表象の性質を知らなければならない。

たとえば，関係が等式で示される場合には，既存表象との合致を知るだけでなく，既存表象の質も把握しなければならない。les livres と l'homme の意味のちがいは，既存表象との関係のあり方の相違から生じるのではなく，既存表象自体の質の差(特殊的具体的表象 ↔ 一般概念)から生じてくるからである。

他方，既存表象との関係が不等式で示される場合にも意味解釈の上では，表象の質が問題になる。この場合にも一般的に既存表象との不一致を知るだけでは不十分なのである。すなわち実際名詞の表わす表象が「浮き彫り」さるべき「背景」である既存表象の質を文脈によって知らなければならない。たとえば次の例で考えてみよう。

(イ) L'homme se forme par l'expérience.

(ロ) Un homme se forme par l'expérience.

(ロ)の un homme の表わす意味は，第4節の例の不定冠詞を付された実際名詞とは異なる。何故なら un homme は一般概念を表わすのに対して des livres 等は個別的具体的表象を表わしているからである。そして，この二つの意味の差は，それぞれが対応している既存表象の質の差(特殊的具体的表象 ↔ 一般概念)から生じる。すなわち個別的表象と対立して新たな表象が形成されるか，あるいは恒久的一般概念と対立して新たな表象が形成されるかのちがいなのである。この意味の差は，不定冠詞の表わす既存表象との一般的な不一致からだけでは理解できない。不定冠詞のみに依拠すれば，二つの例は同一の意味に解消されてしまう。したがって意味解釈をする場合には文脈に依拠せざるをえないのである。

---

* 定冠詞と対立する場合には不定冠詞と部分冠詞は等価であり，同一物として扱わなければならない。したがって部分冠詞という名称は不適当である。鷲尾先生はこれを計数的不定冠詞と計量的不定冠詞と呼ばれた。なお，不等関係を表わす部分冠詞は，鷲尾先生の言われる本来の部分冠詞を含んでいない。(鷲尾猛「フランス語冠詞の基礎概念」)

ところでこの例においては，もう一つ着目すべき点がある。それは un homme と l'homme の意味のちがいである。この二つは，通常教室では，ともに一般概念，普遍的概念と解され「人間というもの」と訳される。しかしこの解釈だけでは，定冠詞に不定冠詞という別な冠詞を付された意味がわからない。この場合には，文脈ではなく，冠詞のちがいによって転化のあり方のちがいが言語的に示されているのであるから，意味のちがいも明確にする必要がある。この意味のちがいは，まさに既存表象との合致か不一致かというちがいから生じるのである。すなわち un homme の表わす表象は一般概念であるが，l'homme の表わす一般概念とは対立する概念である。先にのべたように，l'homme の表象は，話し手の意識内にすでに形成され恒久化された一般概念と合致する。したがって，l'homme se forme par l'expérience という命題は，こと新らしいことを述のべたものではないという話し手の意図が感じられる。これに対して un homme の表わすものは，一般概念ではあるが恒久化された概念ではない。話し手の経験から新たに生れた概念であり，既成の一般概念 l'homme と対比さるべき概念である。したがって un homme se forme par l'expérience によって表わされる命題は，話し手が経験によって新たに獲得した認識であり，不定冠詞 un は定冠詞 le と対立してこの「新たな」獲得を示しているのである。

以上のように文，発話の具体的意味を知るためには，冠詞の表わす転化の具体的内容すなわち等，不等の関係を明らかにするだけでは不十分である。等，不等関係によって結びつけられた既存表象の質を文脈によって明らかにしなければならない。しかし冠詞という言語手段自体は，表象の質を表わさない。冠詞を付された名詞が実際の文脈の中でさまざまな意味をもつとしても，その多様性の原因は，冠詞の機能には求められない。冠詞は，基本的には転化を示す言語手段でしかなく，冠詞相互を判別する特徴は，既存表象との関係の仕方のちがいでしかないのである。

6. 不等関係で結ばれる表象の二つの形——明確な形を表わす不定冠詞と不明確な形を表わす部分冠詞

前節で既存表象との不等関係を表わす冠詞として不定冠詞と部分冠詞をあげた。不定冠詞も部分冠詞も，定冠詞と対立して，ともに既成の表象と合致しない新たな表象の形成を表わす。しかし，この定冠詞と対立する価値規定は，不定冠詞と部分冠詞の機能上の差異を説明するものではない。形態上，歴然と異なる二つの言語手段が存在する以上，二つの冠詞を区別する本質的特徴を考えなければならない。本節では，この点について述べる。

実際名詞の表わす表象については，二つのことが考えられる。第一は，前節で述べた点で，実際名詞の表象と既存表象の関係である。第二は，表象自体の形の問題である。この第二の点が，不定冠詞と部分冠詞の判別に関わる問題である。

たとえば，「テーブル」，「本」などの名詞の表わす表象と，「水」，「バター」などの名詞の表わす表象を比較してみると，両者の形状のちがいは明らかである。すなわち，「テーブル」，「本」などの表象が，特定の明確な形をもっているのに対し，「水」，「バター」などの表象は，明確な形をもっていない。この形状のちがいは，「具体的にテーブルを思い浮かべてみよ」「具体的に水を思い浮かべてみよ」と実際に言われた場合を想定すれば，明らかになるだろう。

このように名詞の表わす表象には，明確な形をもつものと，明確な形をもたないもの，換言すれば，不明確な形をもつものの存在が認められる。(通常は，両者のちがいは，数と量のちがいと考えられている)

不定冠詞と部分冠詞の区別は，この名詞表象の形のちがいから生じたものである。すなわち不定冠詞は，明確な形をもつ名詞表象に適合し，部分冠詞は不明確な形をもつ名詞表象に適合する。

明確な形をもつ名詞表象としては「机」「本」などがあり，不明確な形をもつ名詞表象としては，「水」，「バター」あるいは「勇気」などのいわ

ゆる物質名詞，抽象名詞があげられる。したがって，これらの名詞を実際のフランス語の文脈で用いるなら，un livre, une table, de l'eau, du beurre, du courage となるのである。

このことは，実際の文脈において不定冠詞，部分冠詞のいずれを用いるかという選択の問題が，名詞の表わす表象に個有の形状によって規定されていることを示すかのようである。何故なら，明確，不明確という形状は，今までの例で見るかぎり，個々の名詞表象の自然的属性のごとく思われるからであり，冠詞は，元来，表象の形を表わすものではないように見えるからである。

ところが長い習慣の中で，名詞表象の自然的属性である形が名詞表象から切離されてしまい，切離された表象の形状だけを現在では冠詞が表現するに至ったのである。すなわち不定冠詞は，名詞表象に明確な形を与える機能を獲得し，部分冠詞は不明確な形を与える機能を獲得した。もともとは名詞表象個有の自然的属性が，冠詞を規定したのであるが，今では，冠詞が名詞表象の形を規定するに至ったのである。

とはいえ，すべての名詞表象が，話し手の恣意によって，自由自在に明確，不明確のいずれの形をもとり得るわけではない。統辞論的に言えば，あらゆる名詞が不定冠詞，部分冠詞のいずれをもとり得るわけではない。形状は，元来，対象自体の属性である。対象を意識の次元でとらえ反映する表象も，ある場合には対象に制約されて明確な形をとらざるをえない。また別な場合は，形に関しては不明確なままで表象となり得る。

前者の場合は，たとえば「テーブル」，「本」などの表象である。これらの表象は，それ自体，明確な形をもっており，話し手の恣意によって自在にその形を変えることはできない。この場合には，名詞表象に個有の性格が形を規定し，とり得る冠詞を規定する。これに反して後者の場合，すなわち表象がその個有の性格として明確な形をもたない場合には，表象の形を，冠詞の恣意的選択によってある程度自在に規定することができる。

たとえば次の例を比較してみよう。

(イ)

① avoir *du chagrin.*

② ne pouvoir se distraire d'*un chagrin.*

(ロ)

① faire *du bruit.*

② *Un bruit* se fit entendre.

(ハ)

① La flamme du foyer répandait *de la lumière* dans la pièce.

② Je voyais, au loin, *une lumière.*

(ニ)

① Où trouver un homme qui ait *de la vraie* bonté dans le cœur?

② En cette circonstance, Pierre a fait preuve d'*une vraie bonté.*

上の例を見てまず第一に気がつくのは，対になっているそれぞれの例において，同一の名詞が不定冠詞をも部分冠詞をもとっていることである。このことは，上の例の名詞自体の表わす表象は，その個有の性格として形をもたないことを示している。したがって話し手は，表現意図にもとづいて恣意的に，明確，不明確のいずれかの形状を名詞表象に与えることができる。またこのことを不定冠詞および部分冠詞の選択によって言語的に示すことができるのである。

第二に気がつくことは，話し手の表現意図にしたがって自在に形を与えられる名詞表象は，どの形を与えられるかによって具体的な意味に相違をきたす点である。この点について例の順序にしたがって考えてみよう。

(イ)の ① は，誰か特定の個人が具体的に悲しんでいることを表わす。この悲しみは，特定の個人に具体的であるが，悲しみそのもののイメージは明確でない。これに対して ② の場合は，悲しみが特定の個人に具体的であるだけでなく，さらに特定の原因によってその悲しみが生じていることを示す。すなわち話し手の意識内において，悲しみのイメージが ① の場合よりも明確な姿をとっていることが想像されるのである。言いかえれ

ば，②の場合の表象は，①に比較して明確な形を与えられており，そのことは不定冠詞の付加によって示されているのである。

(ロ)の①は何か具体的に物音がしていることを示すだけであるが，②はさらにその物音が特定の原因，特定の物体から発せられていることを示している。すなわち②の《bruit》の表象は，①よりも明確な形を与えられている。

(ハ)の①は，光源よりも光源から発せられた光そのものに話し手の注意が向けられていることを示す。すなわち話し手の意識内の表象は，光源ではなく光源の存在の結果としてのあたりの明るさである。この表象は②の表象と比べると形状が明確でない。何故なら②の《lumière》ないし《une lumière》という表象は，光自体の表象ではなく，光の原因である光源自体の表象だからである。光の表象よりも，電燈やランプなどの光源の表象の方が明確な形状をもつことは自明であろう。そして，このような話し手の意識にやどる表象の形状の差異を表わしている言語手段は，名詞ではなく冠詞なのである。

さらに(ニ)の例について言えば，①は，抽象的な vraie bonté ではなく具体的に vraie bonté をもっている男の表象が問題になるが，これに対して②では，特定の事情のもとで，特定の行為によって具体的に示された Pierre の vraie bonté が問題になっているのである。この場合にも特定の個人に具体的な vraie bonté よりも特定の個人の特定の行為によって具体的に体現された vraie bonté の方が表象として明確であることは自明である。そして言うまでもなく，この二つの表象の差異は，不定，部分という冠詞の差異によって表わされているのである。

以上の諸例に明らかなように，ある条件のもとでは，不定冠詞および部分冠詞は，話し手の表現意図にもとづいて恣意的に表象に明確，不明確のいずれかの形状を自在に与えることができる。そして，この表象に形状を付与する機能こそが，不定冠詞と部分冠詞を識別する本質的特徴なのである。

7. ゼロ冠詞について

前節まで冠詞が言語表現において果す役割について述べてきたが，その場合問題になっていた冠詞は，具体的には定冠詞，不定冠詞，部分冠詞の三つである。また冠詞の機能と名詞の状態との密接な関連を指摘し，名詞の状態としては可能名詞と実際名詞を識別できると述べた。

ところで，現実の伝達の場に現われる名詞すなわち文脈中の名詞は，すべて可能名詞が転化した実際名詞のはずである。他方，冠詞は，名詞が可能名詞から実際名詞に転化したことを示す言語手段である。とすれば，現実の伝達の場に現われる名詞には，すべて転化の言語的表現である定冠詞，不定冠詞，部分冠詞のいずれかが付加していなければならない。それにもかかわらず現実の伝達の場には，上にあげた三つの冠詞のいずれをもともなわない名詞が，しばしば現われる。すなわち冠詞の欠落する例がひんぱんに見出されるのである。この文脈中の冠詞の欠落をどう解釈すべきか，この点が本節でとり扱う問題である。

言語手段が存在しないということは，通常は，言語的には何も表わさないことを意味する。のみならずこの言語手段の非存在は，話し手，聞き手によって意識されることもない。ところが冠詞の欠落は，通常の言語手段の非存在と事情が異なる。文脈中に現われる名詞が冠詞をともなうということは，フランス語を常用語とする集団の成員にとっては，当然の予想である。したがって冠詞の欠落は，この集団の成員にとって予想外の事実であり，無意識ではすまされない。むしろ欠落は，成員の意識的行為でさえある。それだからこそ冠詞の欠落はあくまで「欠落」であって非存在ではない。のみならず，話し手聞き手によって意識されるこの欠落は，言語的にも何かを表わしているのである。しかもこの欠落の表現する内容は，定冠詞，不定冠詞，部分冠詞とは若干異なる意味でではあるが，後述するようにやはり名詞の転化に関わる事実を表わしているのである。

形態の不在が形態の存在と対立して積極的に言語表現手段として機能している場合，見かけ上形態は存在しないけれども実質的には形態が存在し

ていると考えることができる。このような見かけ上不在の形態を，通常は，ゼロと呼んでいる。この形態ゼロを冠詞の欠落の場合に限ってみてみると，定冠詞等と同様名詞の転化に関わる事実の言語的表現であるから，冠詞の範ちゅうに所属させることができる。したがって冠詞の欠落をゼロ冠詞と称し，一個の正当な冠詞と見なすことができる。

ところでゼロ冠詞が名詞の転化に関わる事実を表わす場合は，二つ考えられる。第一は，可能名詞と実際名詞の状態が等しく，実質的には転化が行なわれない場合である。第二は，転化は行なわれるが，屈折して行なわれる場合である。

第一の場合すなわち転化が実質的に起らない場合は，さらに二つに分けて考えることができる。第一は，名詞自体の性質上転化が生じない場合である。この場合は，名詞が非転化を規定する。第二は，話し手が表現の必要上，転化を恣意的に阻止する場合である。この場合は，第一の場合とちがって，話し手の表現意図が非転化を規定する。

A. 名詞によって規定される非転化

「テーブル」，「本」などの名詞は，文脈から切離してそれだけをとり出した場合，具体的な表象に対応せずさまざまな可能性だけを含んでいた。すなわち可能名詞と実際名詞の間には質的な差異があり，この差異が定冠詞，不定冠詞，部分冠詞の存在理由であった。ところが名詞の範ちゅうに属するものの一部，たとえば個有名詞の場合には，可能-実際の間に質的差異が存在せず，可能名詞の状態ですでに具体的表象と密着している。たとえば Pierre という個有名詞を例にとると，この名詞は，文脈においても文脈から切離なされても質的な差異を生じないのである。文脈から切離なされた Pierre は，現実から離脱したさまざまな可能性ではなく，文脈中の Pierre と同様，具体的表象に対応しているのである。

名詞に可能名詞と実際名詞という二つの状態の分化が生じるためには，名詞は抽象化されなければならない。すなわち現実を離脱して可能性とな

らなければならない。「テーブル」や「本」は，この現実離脱の過程を経た名詞である。

もちろん，発生的に考えれば，名詞はある特定の現実と共に生れる。すなわち特定の対象ないし特定の対象の表象に対する「名付け」として発生するはずである。しかし，特定の現実に密着している限り名詞は普遍的表現手段とはなり得ない。一つの名詞が一つの現実に密着している限り，その名詞はその特定の現実だけの表現手段に止まるであろう。とすれば無限の表現手段を必要とすることになる。したがって名詞が普遍的表現手段となるためには，さまざまな対象ないし表象を同一物と見なす法則性を発見し，それによって名詞を可能性の次元にまで高めなければならない。「テーブル」や「本」は，このような抽象化の過程を経て普遍的言語手段となっているのである。だからこそ文脈の中では具体的現実に対応して実際名詞に転化しなければならないのである。

ところが Pierre という個有名詞には，上のような抽象性が見られない。この名詞は，常に Pierre という具体的存在物ないしその表象と密着している。すなわち現実離脱の過程を経ることなく，したがって可能と実際という二つの状態の分化も生じていない。言い換えると，可能名詞のもつ可能性が，個有名詞という性格のために，きわめてせまく限定されてしまって，可能名詞と実際名詞の間に，事実上は差異が生じないのである。したがって現実から離脱した可能名詞をふたたび特定の現実に対応させる必要，すなわち転化の必要がない。また転化の通常の言語的表現である定冠詞，不定冠詞，部分冠詞のいずれをも必要としないのである。

この種の名詞の非転化は，一部の名詞のもつ未分化という個有の性格に由来している。したがって，これを名詞によって規定される非転化と呼んだのである。また，この非転化という特殊な転化のあり方は，ゼロ冠詞によって言語的に表現される。

なお Pierre のように非転化を規定する名詞としては，他に，demain, hier のたぐい，あるいは，Paris, Rome のような地名などがあげられる。

B. 話し手の意図によって規定される非転化

人名などの場合には，非転化は，話し手の意図とは無関係に，名詞本来の性質によって規定されてしまう。すなわち，特定の名詞が本来もつ未分化という性質が非転化を規定するのである。

ところが可能と実際の二つの状態の分化が行なわれている名詞においても，転化が生じない場合がある。たとえば être homme, devenir roi のたぐいで，この場合には，名詞は実際名詞に転化することをさまたげられ，可能名詞の状態に止まっている。しかも，名詞を可能名詞の状態にとどめるのは，名詞本来の性質ではなく，話し手の表現意図なのである。

可能名詞は，実際名詞のように特定の表象に対応していないという意味で一般的抽象的である。しかし，この一般性は実際名詞に対する場合の一般性であって，可能名詞が名詞一般と化してしまうわけではない。したがってある可能名詞を他の可能名詞もしくは名詞一般と比較すれば，特殊的である。またこの特殊性があるからこそ，転化の際に，表象一般ではなく特定の表象に対応し得るのである。

ところで可能名詞をお互いに識別するこの特殊性は，イエルムスレウの言うシェマのようにネガティブに規定されるものではあり得ない。可能名詞が現実からの離脱によって成立するとはいえ，それは，現実の諸対象の中に存在する法則性の反映である。したがって特殊性もネガティブなものではなく，実際名詞の対応する諸表象に共通の属性として積極的に規定し得るはずである。だから可能名詞の特殊性は，何か実体的なものとして把握できる。

たとえば「私を男にしてください」という場合の「男」は，具体的個別的な男の表象でもなく，さりとて男性一般の概念でもない。具体から一般に至るさまざまな男という対象もしくは表象に共通の属性を表わしているのである。そしてこの属性が可能名詞の特殊性の実体である。être homme, devenir roi において話し手が表現しようとするものは，まさにこの特殊性であり，共通の属性である。

話し手は，時として実体的な表象そのものの表現ではなく，属性の表現を要求する。その場合には話し手は，意図的に可能名詞の実際名詞への転化を妨害するのであり，転化阻止の言語的表現としてゼロ冠詞を用いるのである。

C. 転化が屈折して行なわれる場合

可能名詞と実際名詞とは，さまざまな可能性か，可能性の一つの実現かという意味で質的に異なるが，しかし可能名詞は実際名詞のさまざまな場合を予想している。したがってたとえば tête という可能名詞に関して，Il a *une tête* ronde. だとか Voici *la tête* de Pierre などの転化が行なわれても，話し手聞き手の予想を裏切る転化ではないし，不自然でもない。むろん今まで述べてきたように，tête, と une tête, la tête の間には，既存表象と対応しているかそれとも可能性かというちがいは存在する。しかし，言わば転化の方向自体は，可能名詞の段階で予想されたものである。

ところがこれに対して，tenir tête (はむかう) という文脈に現われる tête は，可能名詞の段階で予想された意味をもたない。予想とは異なる意味を文脈の中でもってしまうのである。この場合，転化が可能名詞の予測する方向にはすすまないのだ，屈折してすすむのだと考えることができよう。したがって，tenir tête における転化を屈折した転化と呼ぶのである。この屈折した転化も，言語的にはゼロ冠詞で表わされる。

以上三つの場合(非転化の二つの場合および屈折した転化の場合)を総括的に考えると，いずれの場合にも転化がまともな形で行なわれていないというのが共通の特徴である。したがって定冠詞，不定冠詞，部分冠詞が言わば正常な転化の言語的表現であるのに対して，ゼロ冠詞は，言わば不正常な転化の指標であるということができよう。

7. 具体的な文脈における名詞の意味の多様性とその原因

冠詞を定，不定，部分冠詞の範囲に限ってみても，具体的な文脈に現われる冠詞を付加された名詞は実にさまざまな意味をもつ。そして名詞の意味のこの多様性は，冠詞の機能の多様性の結果のように思われる。しかし，このことは今まで述べてきた冠詞の単純な機能とは矛盾するように見える。何故なら冠詞の本質的機能は，第一は，既存表象との等，不等関係を表わすことであり，第二は表象の形状を表わすことであるからである。したがって冠詞全体(ゼロ冠詞ははぶく)の機能から結果する多様性はせいぜい三つである。それにもかかわらず，現実に冠詞を付加して文脈に出現する名詞は，三つどころではなく非常に複雑多様な意味をもつ。定冠詞一つをとっても現実の意味は一つではない。それ故定冠詞の用法に関する複雑な記述が存在する。

ところでこの文脈中の名詞の意味の多様性は，多くの場合，冠詞の機能の複雑さが原因だと考えられている。たとえば，定冠詞を付された文脈中の名詞の意味の多様性は，定冠詞の機能の複雑さに由来するのだと考えられ，定冠詞のさまざまな用法に関する記述が出現するのである。

しかし実際は冠詞の機能の複雑さによって多様な意味が生じるのではない。たとえば，定冠詞は，実際名詞と話し手の意識内の既存表象とを結びつける役割しかない。名詞の文脈中の多様な意味は，冠詞の機能の結果ではなく，むしろ実際名詞の対応する既存表象の多様性の結果である。すでにみたように，大ざっぱな分け方をしても，既存表象には，一般的恒久的表象，暫定的表象，言語的に既出，未出の表象などの別がある。さらに分類基準を変えたり，表象を諸側面から見たりすれば，対象自体の豊富さに応じて，さまざまな面を発見できよう。しかし，いずれにせよ，そのさまざまな面は，表象の多様性であって冠詞の機能の多様性ではない。

もちろん発話ないし文の意味解釈を実際に行なう場合には，表象の質の多様性を考慮しなければならない。さもなければ発話や文は，スープの出しがらになってしまう。しかし既存表象の質を示すものは，前にも述べた

ように冠詞ではない。文脈である。前者の機能と後者の機能を混同するならば，冠詞の本質的性格を見誤ることになろう。

8. 結び

前節まででフランス語の冠詞の基本的性格を明らかにしてきた。すなわち冠詞の基本的性格は，転化に関する体系的表現手段だということである。

ところで冠詞に関して，フランス語と日本語の比較対照を行なう場合には，以上のフランス語冠詞の基本性格をふまえて，日本語についてこれとの対応をこまかくあたっていかなければならない。しかし，はじめにも述べたように，そのような比較対照は，筆者の力の範囲ではない。したがって，比較対照を行なう場合につきあたると思われる問題点を若干指摘してこの小論を終わりたい。

1. フランス語と日本語は，別の論理によって組織されている。したがってフランス語冠詞と一対一で対応するような日本語の表現体系は存在しないだろう。

2. 1の前提を認めた上で，なお日本語の中に冠詞と対応する言語的要素を求めるとすれば，それは同一次元の要素ではないだろう。多様な次元の表現手段が，フランス語冠詞に対応するにちがいない。たとえば，或る場合には，いわゆる辞などの文法的次元で対応することになろう。

3. したがって対応関係を組織化体系化するためには，具体的な対応例を多量に集め，その中から対応の法則性を発見する以外にはない。